

## 気になる単語

新しい言語を学ぶ楽しさとは何だろうか。覚えた表現を使ってみて通じたときの楽しさ、そこから人間関係ができていく楽しさ、情報が増えて世界が広がっていく楽しさ、などいろいろあるだろう。最近ではドラマ、アニメ・マンガ、歌、ゲームなどをきっかけに日本語学習を始める人が増えている。

そのようなことばの学習の楽しみの一つに、「気になる単語」との出会いがある。いままで英語や中国語を勉強してきたが、その過程で、母語の日本語では一言で言い表せないような単語にいくつか出会い、そのことばの意味をことさらに意識するようになっていく。

例えば、中国語には‘鮮’<sup>シエン</sup> (xiān) という語がある。イントネーション (声調) は高くまっすぐに保つ第1声である。これは「うまみがある」という意味である。(うっかり上昇の第2声にすると‘咸’<sup>シエン</sup> (xián) 「塩辛い」という意味になってしまう。) 肉や魚はもちろんだが、シイタケやタケノコなどのうまみもこれで表せる。日本語同様、甘い、辛い、塩辛い (しょっぱい)、酸っぱいなどの味覚ことばもあるが、それらに加えて、この xian がしばしば料理を形容するときに使われる。この言葉を習うまで、私は「うまみ」を十分に意識していなかったのだと思う。だからこの言葉を覚えたときにある種のショックを覚え、それ以来、料理のうまみを意識するようになったのだ。「うまみ」がどのようなものかはもちろん知っていた。うまみは、だしを利かせる日本料理にも欠かせない感覚であるはずだ。しかし、日本語では、これを「甘い」や「辛い」のような形容詞1語では表現できない。やはり日本語社会では、「うまみ」を表現することへのニーズが弱いのだと思わざるを得ない。いや、多くの日本人は「うまみ」を十分に意識していないのではないかとさえ思う。そのぐらい中国ではこの xian をよく使うのである。2013年に和食が世界無形文化遺産に認定されたとき、京都の老舗料亭の主人、村田吉弘氏が、和食は世界で唯一「うまみ」を中心に構成されている料理だと言っていることを知ったが、本当にそうだろうかと思う。少なくとも庶民の日常生活レベルでは、中国の人 (特に南の方の人) の方が料理のうまみを気にしているように私には感じられるのである。

英語にも「気になる単語」がいくつかある。例えば、involve や engage である。involve は「巻き込む」などと訳される。確かに、be involved in an accident といえば、「事故に巻き込まれる」となる。「服が機械に巻き込まれた」という場合も同じ文型が使える。しかし、be involved in ~ には「~に携わる」「~に取り組む」といった、より積極的な使い方もある。be engaged in ~ になると、さらに強い関わり方となる。involve も engage も This project involves many people. のように能動文で使われることもある。しかし、私には be involved in ~、be engaged in ~ という受け身の文で積極的な意味を表せるところに、大きな意味があるように感じられる。自分で選んだというよりは一生懸命やっているうちに自然にその仕事に取り組むことになり、そしてその仕事を積極的に楽しんでいるように感じられる。日本語では、どうもこの感覚をぴったりと表現することが難しい気がするのである。

東京・イグナチオ教会のハビエル・ガラルダ神父は、engage と同語源のフランス語 engagé (アンガジェー) は fanatic と outsider の中間の、心のバランスのとれた状態を指すと述べている (『自己愛と献身』講談社現代新書)。のめり込みすぎて周りが見えなくなるのでもなく、気持ちを向けることができずにあきらめてしまうのでもない、自然に物事に集中できているような心理状態を指すものだと思う。そう考えると I am engaged in the work. はとてもいい精神状態で仕事に取り組んでいることを示しているのだと思う。これを一言で表せる日本語を私は見つけられずにいる。

昔、国語の教科書に詩人、吉野弘の **I was born** という散文詩が出ていた。作者が英語を習い始めたころに **I was born** が受け身であることから「正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね」と父親に話しかけるという内容である。**involved** や **engaged** が受け身であるのに積極的な意味を表せることも、この **I was born**に通じるものがある。与えられた状況の中で前向きに物事に取り組むことを教えられているように感じるのである。

最後に、日本語の例を挙げてみよう。環境分野の活動家として、2004年にノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイ氏は、2005年の来日時に「もったいない」という言葉に接して、「3R (Reduce、Reuse、Recycle) を一言で表す言葉であり、さらに命の大切さや、かけがえのない地球資源に対する Respect (尊敬の念) という意味も込められていることに感銘をうけ、環境を守る国際語「MOTTAINAI」として世界に広げることを決意」したそうである (MOTTAINAI キャンペーンのサイト <http://mottainai.info/maathai/>)。マータイ氏が「もったいない」に接したときの気持ち、それはことばを学ぶことの意義と楽しみを表している。

みなさんにはこのような「気になる単語」があるだろうか。

(松下達彦、書き下ろし)